

# (財) 和歌山県文化財センター年報

1 9 9 4

財団法人 和歌山県文化財センター



1. 根来寺坊院跡 調査地全景（北々東より）

調査地中央部に人工の谷状地形が広がり、西側に鎌倉時代の居住地が認められた。



2. 北山廃寺跡 中門瓦だまり

瓦の分布に規則性が見られ、建物の倒壊の状況を示している。





3. 丹鶴城 炭納屋群の基礎

石垣を積んで階段状に造成された平坦地に、建物群の礎石が認められた。



4. 野上八幡宮社殿群 竣工

34年ぶりの屋根葺替・塗装修理により見違えるようになった社殿。

# 目 次

## 巻頭図版

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| 1. 根来寺坊院跡 調査地全景 | 3. 丹鶴城 炭納屋群の基礎 |
| 2. 北山廃寺跡 中門瓦だまり | 4. 野上八幡宮社殿群 竣工 |

平成6年度(財)和歌山県文化財センター受託事業一覧 ..... 1

## 埋蔵文化財・発掘調査

根来寺坊院跡(第3次) .....	2
山口遺跡 .....	4
丹生都比売神社 .....	5
金剛峯寺遺跡(尼僧研修道場):出土遺物整理 .....	6
北山廃寺跡(第2次) .....	7
溝ノ口遺跡 .....	8
八反田遺跡(第4次) .....	9
丹鶴城 .....	10

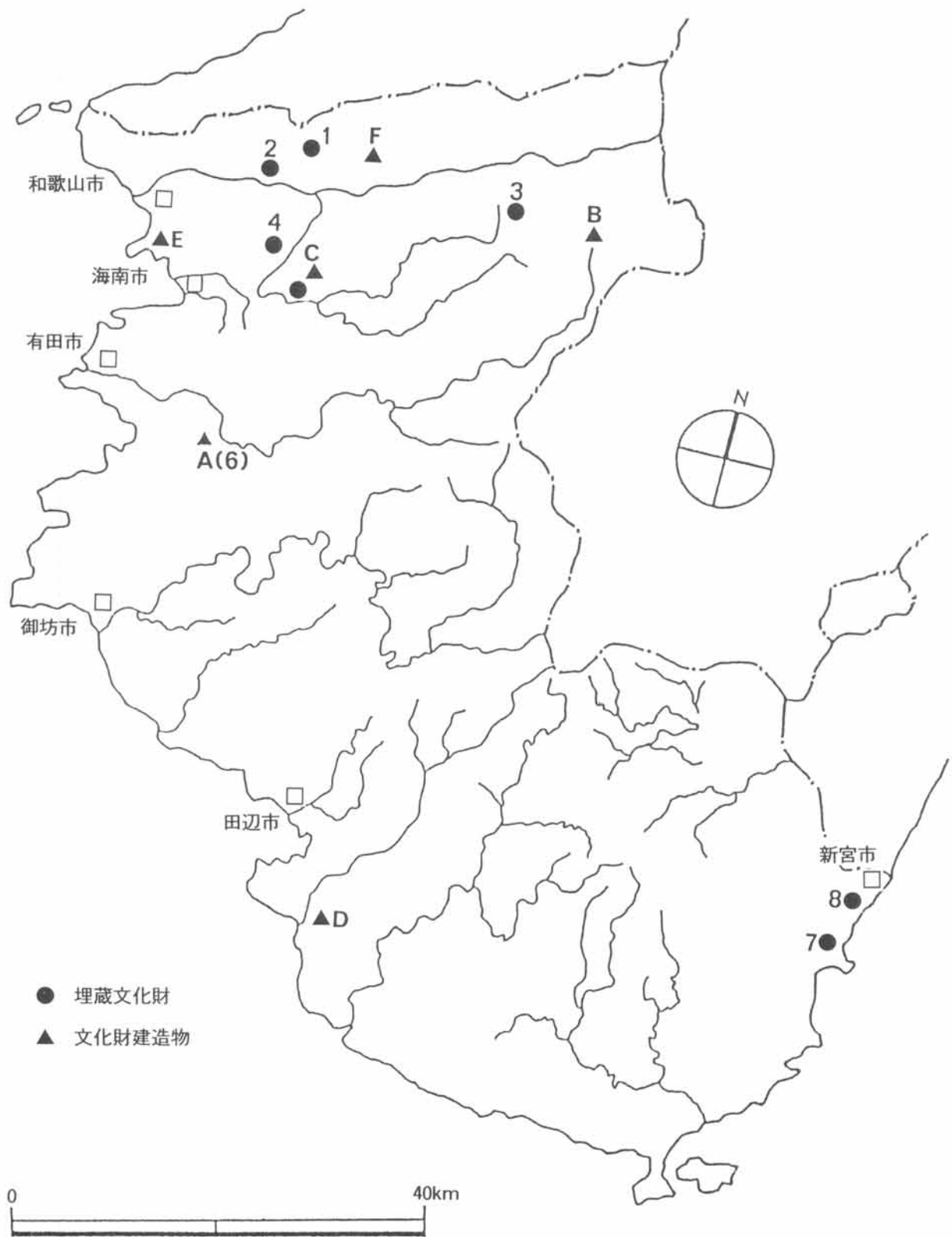
## 文化財建造物・保存修理

普賢院四脚門	重要文化財	.....	12
金剛峯寺大主殿ほか	県指定文化財	.....	13
野上八幡宮本殿ほか	重要文化財	.....	14
粉河寺庭園(六角堂)	国指定名勝	.....	14
日神社本殿	県指定文化財	.....	15
海禅院多宝塔	和歌山市指定文化財	.....	15
長樂寺仏殿	重要文化財	.....	16
〃	:防災工事に伴う発掘調査	.....	17

## 海外研修報告

韓国:菅原 正明 .....	18
中国:佐伯 和也 .....	20

(財)和歌山県文化財センター 平成6年度概要 ..... 22



受託事業 所在地一覧



平成6年度(財)和歌山県文化財センター受託事業一覧

\*未収録

事業の名称		所在地		契約期間	規模	委託機関
埋	県道泉佐野・岩出線改良工事に伴う根来寺坊院跡第3次発掘調査	那賀郡岩出町 根来	1	6.12.2~7.3.31	1,959.0 (㎡)	和歌山県 岩出土木事務所
	県道和歌山・貝塚線道路改良工事に伴う山口遺跡発掘調査(Ⅰ)	和歌山市 山口	2	6.6.18~7.3.20	4,030.9	和歌山県 和歌山土木事務所
	県道和歌山・貝塚線道路改良工事に伴う山口遺跡発掘調査(Ⅱ)	和歌山市 山口	2	6.6.18~7.3.20	1,343.6	和歌山県 和歌山土木事務所
	県道和歌山・貝塚線道路改良一種山口遺跡発掘調査	和歌山市 山口	2	6.6.18~7.3.20	1,039.5	和歌山県 和歌山土木事務所
蔵	丹生都比売神社防災工事に伴う丹生都比売神社境内遺跡発掘調査	伊都郡かつらぎ町 上天野	3	6.9.27~6.12.20	93.0	宗教法人 丹生都比売神社
	北山庵寺跡第2次発掘調査	那賀郡貴志川町 北山	4	6.12.17~7.3.25	410.0	貴志川町
文	団体営農整備事業(椋木線)道路新設に伴う溝ノ口遺跡発掘調査	海南市 溝ノ口	5	6.12.20~7.3.31	1,250.0	海南市
	長樂寺防災工事に伴う発掘調査	有田郡吉備町 植野	6	6.12.7~7.3.31	80.0	宗教法人 長樂寺
	佐野川中小河川改修に伴う八反田遺跡第4次発掘調査	新宮市 佐野	7	6.4.19~7.3.3	900.0	和歌山県 新宮土木事務所
* 財 *	丹鶴城防災道路建設に伴う発掘調査	新宮市 新宮	8	6.8.9~7.2.28	950.0	新宮市
	一般国道24号(和歌山バイパス)川辺遺跡第四次遺物整理	和歌山市 川辺		6.4.15~7.3.15		近畿地方建設局 和歌山工事事務所
	一般国道42号湯浅御坊道路(Ⅰ)藤並地区遺跡第二次遺物整理	有田郡吉備町 藤並		6.4.15~7.3.14		近畿地方建設局 和歌山工事事務所
	金剛峯寺遺跡(尼僧研修道場)出土遺物整理	伊都郡高野町 高野		6.8.12~7.3.31		財団法人 高野山文化財保存会
文 化 財 建 造 物	重要文化財 長樂寺仏殿保存修理設計監理	有田郡吉備町 植野	A	6.4.1~7.3.31	一棟	宗教法人 長樂寺
	重要文化財 普賢院四脚門ほか2棟保存修理設計監理	伊都郡高野町 高野	B	6.4.1~7.3.31	三棟	財団法人 高野山文化財保存会
	重要文化財 野上八幡宮本殿ほか二棟保存修理設計監理	海草郡野上町 上町小畑	C	6.4.1~7.3.31	三棟	宗教法人 野上八幡宮
	県指定文化財 日神社本殿保存修理設計監理	西牟婁郡白浜町 十九瀨	D	6.9.6~7.3.31	一棟	宗教法人 日神社
	和歌山市指定文化財 海禅院多宝塔保存修理設計監理	和歌山市 和歌浦中	E	6.11.22~7.3.31	一棟	宗教法人 海禅院
	県指定文化財 金剛峯寺大主殿ほか保存修理設計監理	伊都郡高野町 高野	B	6.11.22~7.3.31	八棟	宗教法人 金剛峯寺
	国指定名勝 粉河寺庭園(六角堂)保存修理設計監理	那賀郡粉河町 粉河	F	7.1.20~7.3.31	一棟	宗教法人 粉河寺

## 県道改良工事に伴う根来寺坊院跡の発掘調査

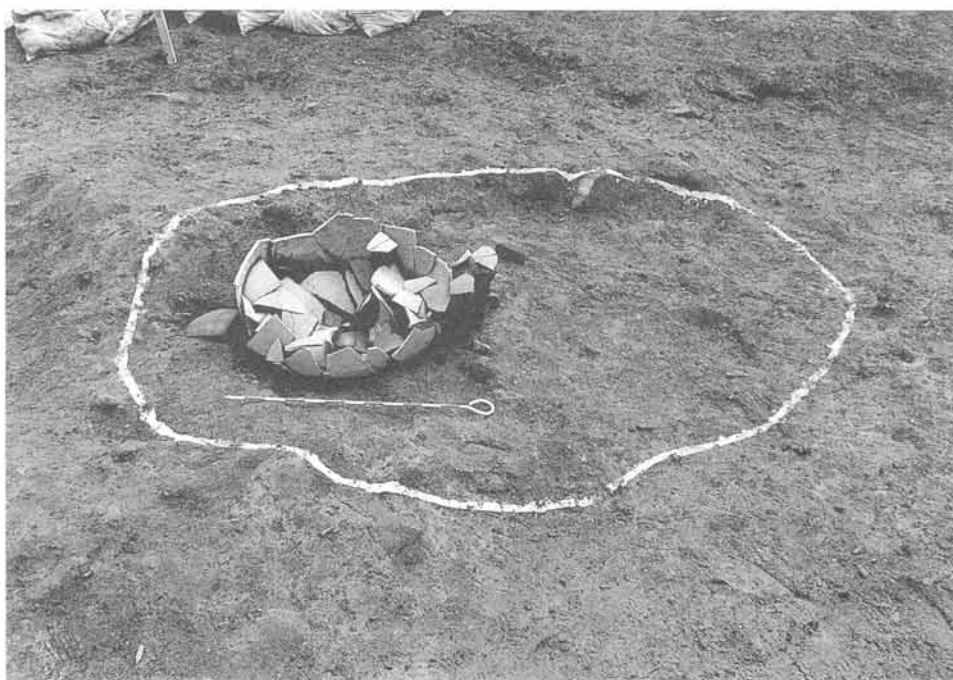
今回の調査地区は、根来寺の中心部から西に約1km離れたところにあり、第1次調査地区と第2次調査地区（平成5年度）の間に位置している。調査地は、北側の和泉山脈から南側の紀ノ川にかけて緩やかに下降していく洪積台地の上に存在している。現状地形は、全て休耕田で8段の段差から成り、調査地の北と南で約5.5mの高低差がある。

遺構は、奈良時代から室町時代にかけて改変された谷状地形、鎌倉時代の柱穴群・井戸・溝、室町時代の堀・土橋などが中心となり、江戸時代の溝・田畑の畝溝を明らかにしている。谷状地形の上部では、江戸時代に埋められた室町時代末の池が検出されている。遺物は、各時代の遺構・遺物包含層から多量に出土している。大半は、奈良時代の須恵器で占められている。

改変された谷状地形は、調査地の東側約半分の面積を占める大規模な遺構である。現状の田畑の区画に沿う位置で検出されている。南北延長41m以上、東西幅24m以上、深さ約2mの規模である。土砂の堆積状況、出土遺物から上部の土砂（礫を極めて多量に含む層）は江戸時代に人為的に埋められたもの、それ以下は奈良・鎌倉・室町時代に谷地形を岩盤まで掘削した後に、順次自然堆積したものと考えられる。遺物は下層から古墳時代末～奈良時代の多量の須恵器と平安時代・鎌倉時代のものが少量出土している。

土坑に据えられた須恵器甕は、谷状地形の東肩付近に位置する。直径85cm、深さ25cmの据え穴を掘り込んで須恵器の大甕を据え付け、根石を入れて大甕を固定している。大甕は、谷状地形に

土砂が堆積する直前に壊れ、大半が土器の内側に落ち込んだ状況で出土している。土坑の西側の土砂内からは古墳時代末～奈良時代の須恵器が特に密集した状態で多量に出土している。



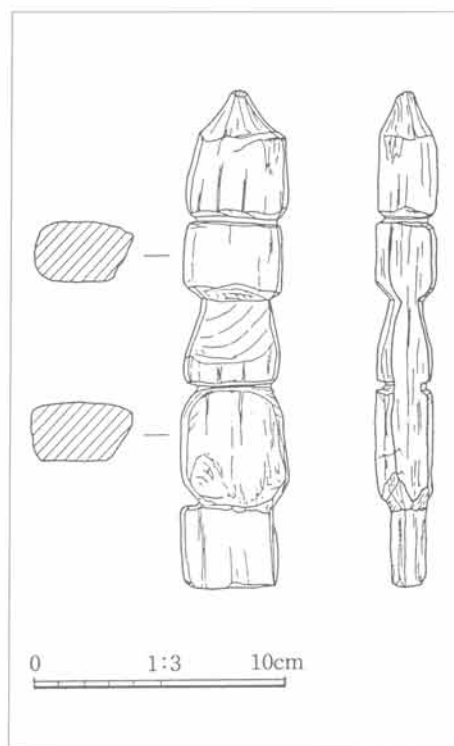
須恵器大甕の出土状況（西から）

丘城を取り巻く堀は、調査地の南端で東西方向に二ヶ所見つかっている。堀の検出した全長は約27mで、幅7m以上、深さ2mある。西側は現在の田畑の区画の形からさらに調査地外へ続くことが確認でき、1989年度岩出町教育委員会の調査した堀に続くものである。東側は現在の田畑の区画からでは、堀の延長を捉えることは難しい。

堀には真中に一ヶ所の掘り残し部分が見られる。つまり調査地の北側に存在する丘城への通路となる「土橋（通路）」を造り出している。堀の掘形の断面形は、それぞれ逆台形（箱堀）の形をしている。また、堀内部の土層観察によると堀の中に埋まった土は、何度かに分けて埋め立てられたものと考えられる。出土遺物は16世紀前半を主体としているが、全体から見た土器量は少なく、曲物の底板・桶の側板・加工材などがまとまって出土している。

堀は中世の丘城を取り巻く遺構と考えられ、文献資料から500m以上の堀や土塁に囲まれた非常に大規模な城跡であった施設の一部と考えられる。昨年度の調査成果を含めて考え合わせると、調査地の北西側に位置する丘陵に、非常に

堅固な護りを固めた戦国時代の武装集団“根来寺僧兵の居城”が存在することは間違いないと考えられる。  
(土井 孝之)



堀から出土した木製五輪塔



堀と土橋（通路）（西北西から）



## 山口遺跡の発掘調査

山口遺跡は、和歌山市の北東部、那賀郡岩出町との境界近くに位置している。地形的には、背後に連なる和泉山脈から急激に南下して紀ノ川に注ぐ雄ノ山川のつくりだした扇土地にあたり、調査地は標高14～17m前後を測る。

今回の調査は、新たな県道の敷設に伴うもので、道路該当部分約4,800㎡と民家の移転に伴う代替地約980㎡、総計5,780㎡である。

調査の結果、遺構としては弥生時代の溝1条、古墳時代後期の掘立柱建物2棟、平安時代中頃と考えられる掘立柱建物3棟のほか多数の柱穴、不整形な土坑などを検出した。

そのほかゆるやかに蛇行しながら南に流れる大規模な自然流路の跡を検出した。この流路の最上層から白鳳から奈良時代のものと思われる瓦片が出土している。

全調査区の遺物を大別すれば、弥生時代後期のもの、古墳時代後期のもの、奈良時代～平安時代のものに分けることができる。この内90%が弥生・古墳時代のもので、両者の比率については、ほぼ拮抗する割合と言える。出土遺物としては、弥生時代後期の壺・甕・高杯、古墳時代後期の須恵器の杯蓋・杯身・甕、土師器の甕・竈などが出土している。また、特筆すべき遺物としてサヌカイトの破片が13固体出土している。これらの破片は、あきらかに人為的に剝離させたもので、石器を造りだす前段階のものである。

(村田 弘)



古墳時代の土器

## 丹生都比売神社境内遺跡の発掘調査

丹生都比売神社は、紀ノ川中流域南岸の標高約450mに忽然と開ける小盆地に鎮座し、古来高野山の鎮守の神となっている。遺跡は、この丹生都比売神社の境内に重複する範囲に位置している。丹生都比売神社と高野山は古くから密接に繋がり、また、高野七口の主要ルートである高野町石道が同神社を経由するため、高野参詣には立ち寄り詣でるべきところとされ、古来盛況を呈していたところである。

今回の調査は、防災施設改修工事による自動火災報知機および消火設備設置に伴い、ケーブルおよび管を埋設するため本殿・楼門の周囲を中心とした範囲について調査を行なった。

遺構検出面は、大別して地山面と整地土面の二面に存在し、両面とも東南東から西北西に緩やかに下降する。遺構は、鎌倉時代の瓦を再利用して作られた暗渠排水溝・室町時代の社の土壇などがある。特筆されるものとして、本殿背面の裏山斜面において経塚の一群が発見されたことである。

出土遺物の大半は、二時的に投棄された鎌倉時代の瓦で占められている。経塚を省いて、遺構や整地層の時期を確定付ける遺物は僅かであるが、経塚からは銅製の経筒をはじめ、まとまりのある遺物が出土している。

通常、禁足地として地面を掘り返すことなど許されることのない聖域であるだけに、必要不可欠な防災工事に伴い様々な調査成果を上げることができた。しかし、神仏信仰の中での経塚の性格の位置付けなど、今後に残された問題も多々あると思われる。特に、遺物と共に埋め戻した経塚部分の再調査もしくは保存方策が最も優先されるべき課題であろうと思われる。 (土井 孝之)



経塚の西群集石状況（東北東から）

## 金剛峯寺遺跡（尼僧研修道場）遺物整理事業

宗教法人金剛峯寺の委託により昭和60年度に尼僧研修道場建設予定地の発掘調査を実施した。今年度はこの遺物整理事業をおこなった。以下その概要を記す。

調査の箇所は高野山の中心に近く、広範囲な金剛峯寺遺跡の中での時期的な位置づけとしては、概ね平安時代末（12世紀中頃）から近代に至るものと出土遺物から判断される。

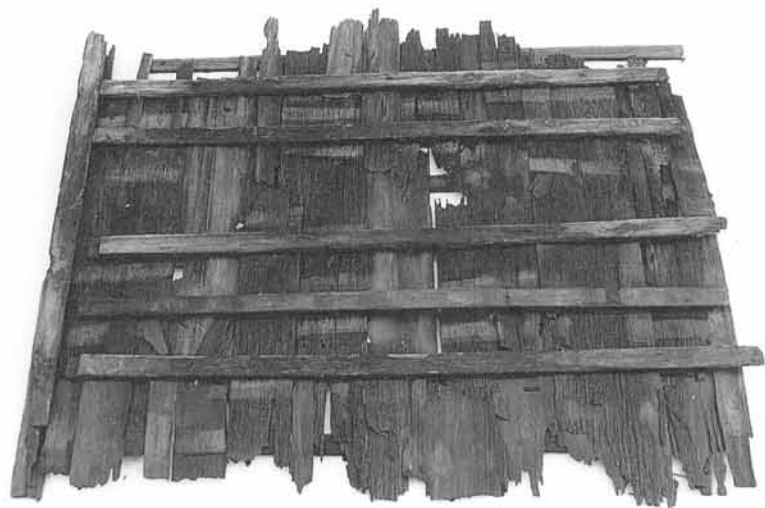
遺構は大きく分けて三時期に分けることができ、確認されているものの中では最古の舞良戸が出土した平安時代末期の土坑、室町時代中頃の溝、江戸時代の土坑が検出されている。以上の遺構は、その共伴遺物から時期決定のできる代表的な遺構であり、すべての出土遺物から判断すれば、この地点は金剛峯寺遺跡の中でも、平安時代から江戸時代まで連綿と建造物が立っていたことを窺うことができる。着目すべき出土遺物の一つとして、12世紀代と考えられる整地層から「東寿院」と底に漆書のある漆器碗がある。このことから、かつてはこの箇所、或いはこの近隣に「東寿院」という建物が建っていたであろうと考えるのが妥当である。

出土遺物全般で目立って多いものは瓦器、土師器の皿であり、この瓦器の中でも小碗の出土量が割合的に非常に多く、他の中世遺跡と出土の様相を異にする。このことの意味は、寺院遺跡としての性格の範疇で考えられるもので、次期からの金剛峯寺遺跡の発掘調査に注目し、瓦器小碗の用途を考える必要性が有る。

他には備前焼の摺鉢・甕・壺、常滑焼の甕、瀬戸灰釉・天目茶碗、中国製青磁・白磁・染付、瓦質土器、土師質土器、東播系こね鉢、伊万里焼、唐津焼、産地不明の近世陶磁器、石鍋、金属製品、木製品などの多種多様の遺物が出土している。（佐伯 和也）



「東寿院」銘漆碗



舞 良 戸



## 北山廃寺第2次発掘調査

北山廃寺は、那賀郡貴志川町北山に所在する白鳳時代の寺院で、貴志川の支流である丸田川北岸の河岸段丘上に立地している。寺域と主要遺構の確認を主な目的として、平成5年度から3か年の計画で調査を開始している。

昨年確認した西面回廊跡に取り付く南北方向の溝（2-S D）の延長部分を確認した。この溝は、東に曲がり、中門跡に取り付くと推定されるので今回検出した溝は、回廊跡南面に取り付く溝と考えられる。工房跡と見られる掘立柱建物（213-S B）も検出した。この建物については、火災に遭っていることが検出状況から判明している。

今年の大きな成果として二点ある。1点は塔跡の正面にあたる位置で広い範囲の瓦溜りを検出したことがあげられる。小字名が「大門」であることから、中門跡の瓦溜りとみられる。位置から考えて中門の可能性が高く、出土状況から建物がそのまま倒壊したと思われる。2点目は塔跡の北側で瓦溜りを検出したことである。昨年の調査で、塔跡の東西で金堂跡が確認されなかったことから金堂跡のものとするのが可能である。

塔心礎が半地下式と古い形式であること、塔跡の40m北側で検出した瓦溜りを講堂跡の北面の瓦溜りとすると、これまでに検出した瓦溜りが全て南北に並ぶことになり、四天王寺式の伽藍配置が想定できる。

創建時期についても瓦と土器の検討から7世紀中頃を大きく下らない時期で、全国的にみても古い寺院に属する可能性が高くなってきた。

（富加見 泰彦）



北山廃寺全景



中門跡瓦溜り



金堂跡瓦溜り

## 溝の口遺跡の調査

今回の調査は団体営農道（椋木線）新設に伴うものである。調査面積は約1,250㎡である。

遺物はコンテナにして42箱分が出土した。内容は縄紋土器・弥生土器・土師器・瓦器などの土器類、石斧・石鏃・スクレイパーなどの石器類であるが、中でも縄紋土器が最も多数を占める。

遺構は調査地が狭小にも関わらず、密度が高く総数 964が検出された。主要なものとしては縄紋時代の土器棺墓・配石遺構・土坑、弥生時代中期の竪穴住居跡・土坑、8世紀もしくは9世紀と思われる掘立柱建物、中世の溝や土器窯などがある。その他の遺構はピット状のものであった。検出した遺構の時期は縄紋・弥生時代のものが多く、その他の時期のものは少数であった。これらの遺構には所属時期の違いによる分布傾向がみられる。縄紋時代の遺構は調査地の東側に集中し、この 250㎡足らずの調査地で検出された遺構数は574あるが、その内の90%以上が縄紋時代のものと考えられる。一方、弥生時代の遺構は調査地の西側に分布している。このような非常に顕著な分布状況は遺跡全体の傾向を反映しているものとみなせるであろう。

次に遺物包含層・遺構の遺存状況であるが、調査地の西側から中程にかけては水田化の際の地形改変が著しく遺物包含層はまったく存在せず、遺構も上部が削り取られており、遺存状態は良好ではなかった。一方、東側調査区は川岸段丘の縁辺に立地するため、あまり後世の削平を受けていない。この地区では段丘に沿うようにして、調査地の中に幅約2mの範囲で縄紋時代の遺物包含層が遺存していた。したがって、この辺では遺構の遺存状態も良好で遺物の出土量も豊富であった。なお、調査は平成7年度も継続される予定である。 (佐伯 和也)



調査区西側（西から）



調査区東側（西から）

## 佐野川中小河川改修に伴う第4次発掘調査（八反田遺跡）

八反田遺跡は、佐野川下流域に展開する弥生時代の集落遺跡である。今回の調査は佐野川に合流する小河川荒木川の改修部分約900㎡を発掘調査した。

その結果、調査区を斜めに横切る自然の河川を検出した。確認できた最終段階の川幅は、約8mである。平面では確認できなかったが断面での観察では、複数回の流れが認められる。

河川が最終的に埋没したのは、埋土から出土した陶磁器等の遺物から判断して近世～近代と推測される。この時期は、滞水状態が長く続いたとみられ有機物の沈殿層が厚く堆積している。下層は、砂層と粘土層の互層からなっているが砂層が主流である。遺物はほとんど含まないが、まれに、古墳時代の須恵器片や弥生土器の破片が出土する。河川は湧水が激しく部分的に約2m掘り下げたにとどまった。よって川底は確認していない。一方、調査区南端で弥生時代の包含層を検出したが包含層は西に従って希薄で、その検出状況から、遺跡の中心は東に伸びることが明らかとなった。包含層を除去した段階で、落ちこみ状のくぼみを検出したが、遺構として認定する確証は得られなかった。遺物は弥生時代では、後期の土器、石器、古墳時代の須恵器、中世の土師器皿、山茶碗、近世の陶磁器等と多岐にわたって出土している。

調査結果からは、遺跡の主体は東に広がる蓋然性が高く、遺跡の南端を確認したといえる。これは遺蹟地図に示された遺跡の範囲とも符号する。

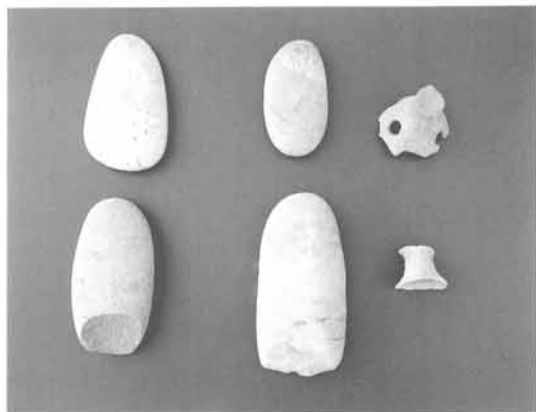
（富加見 泰彦）



八反田遺跡全景



河川断面



河川出土遺物



## 丹鶴城跡の調査

——城内で発見された炭納屋群——

1633年に築城された丹鶴城は熊野川の河口近くにあり、天主台他の主だった建物は小高い山の上に造られているが、場内の一角に大規模な船着場を設けている。正保年間（1644～1647）製作とされる内閣文庫所蔵の丹鶴城絵図には、城郭の縄張りや船着場の形が正確に描かれており、船着場が築城当初にすでに造られていたことがわかる。

この船着場は一部に改変の跡がみられるが、全体としては非常に保存状態が良く、独特の雰囲気をかもしだしている。この船着場近くに新宮市が防災道路の建設を計画したため、今回の発掘調査を実施することになった。

### 発見された遺構

防災道路の予定地を発掘調査していたところ、礎石建物（図中1～14）が軒を連ねて建てられているのが見つかった。建物の大きさは6m×8～20m程で、建物の中は防湿と重量に耐えるため炭粒と砂利を混ぜたもので舗装されている。建物の屋根は板か椀皮で葺かれていたらしく、建物の周囲には瓦はあまり出土しない。

この建物群は石垣を積んで階段状に造成された平坦地に建てられており、船着場からは階段や坂道で出入りするようになっている。建物9と11のあいだは礎石が失われているが、炭と砂利の舗装面は残っているので、本来はこの部分にも建物があったことは間違いない。つまり、船着場近くの平坦地には、目一杯この種の建物が建っていたことになる。

### 建物群はなにか？

この建物群は19世紀頃に大規模に修復されており、石垣の改修や地盤の嵩上げ、および建物の建替えがおこなわれている。この時の整地土のなかから備長炭が多数出土した。また、改修前の建物には床下に堆積した炭粒層が確認できるところもある。そのため、この建物群は文献に記された「炭納屋群」であることが判明した。

発見された炭納屋群が、何時造られたのかは今のところはっきりしていないが、地層の堆積状態から17世紀末以降に造られたものとみられ、その後、明治の取壊しまで維持・管理された模様である。

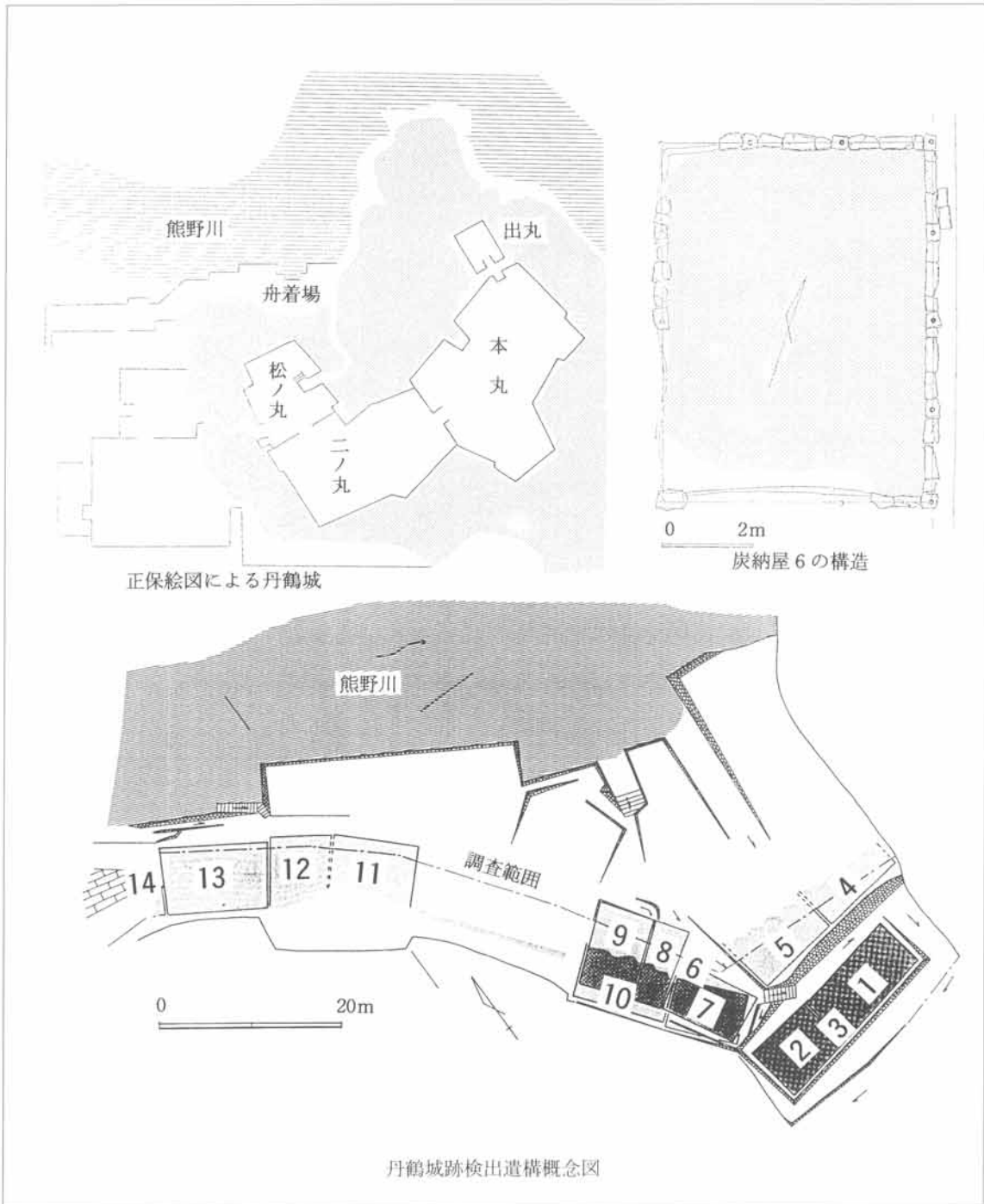
### 発見した炭納屋群の意義

見つかった炭納屋群の床面積は1000㎡以上あり、炭俵1万表近い収納力があることになる。とても城内の消費用とは考えられず、対外的な経済活動のための施設といえる。新宮水野家は炭の専売をおこない財政が豊かであったことが文献に記されている。とりわけ特産品の備長炭のもたらす利益は大きかったであろう。城内に炭納屋群をおくことは、本来は軍巷であった船着場の平

和利用といえるが、江戸との廻船ルートと熊野の山々に深く関わる水野家ならではの施設であろう。

今回の発見は文献の記述を実証する経済・流通史上貴重な発見といえるし、城郭内の港湾施設の実態が明らかとなったのは全国でも初めてのことである。このような貴重な遺構が保存状態も良く、往時の姿を目の当りにすることができるのである。

城・舟着場・炭納屋群・熊野川・山々・太平洋が一体となった歴史的景観は、実に新宮の地に相応しい重要な遺産といえよう。 (武内 雅人)



## 重要文化財 普賢院四脚門 ほか二棟保存修理の設計監理

普賢院は、高野山の千手院谷に位置する塔頭寺院である。四脚門は、明治25年(1892)に現在位置に移築され、昭和40年(1965)に寛永年間に造営された旧行人方東照宮の遺構として、その装飾性の強い意匠、巧みな手法に地方的な特色のみられることが注目されて重要文化財に指定された。

旧行人方東照宮四脚門の遺構であるといわれるが、物的証拠はなく定かではない。旧行人方東照宮は、行人方本山の興山寺(現在の金剛峯寺)の裏山にあり、創建は寛永8年(1631)である。

慶安2年(1649)に江戸幕府より領地が特賜され、興山寺ではすぐさま「御佛殿」の造替に取りかかり、慶安3年春には完成させている。この時の造替範囲は不明であるが、中心建物の「御佛殿」のみの造替とは考えにくく、すべての建物が造り替えられたと推察される。四脚門も造替されたと考えられ、判然としない建立年次は「慶安3年」とした方が妥当なところであろう。

解体調査によって知られた建立後の修理は、元治元年(1864)の化粧軒裏板の墨書「九度山／棟梁／林蔵／元次元年子ノ年／六月十二日よりうら板／はり初之／なぐらむら／下大工里太郎」により屋根・小屋組・化粧軒裏板の修理のあったことが判明した。これは、家康の250年忌にむけての準備と考えられる。今回の修理工事は、全てを解体する根本修理とし、剝落して全体像の判然としない彩色塗装の復原も併せて行う。

なお、並行して金剛三昧院四所明神社本殿と上杉謙信霊屋の檜皮葺替修理も行った。本殿は金剛三昧院の鎮守で、墨書により天文21年(1552)に建立されたものと考えられる。昭和44年(1969)に解体修理が施工され、25年が経過している。

霊屋は、謙信およびその子景勝の廟所であるが、創建は詳らかではない。謙信は天正6年(1578)、景勝は元和9年(1623)に亡くなっているため、前後して建立されたものと考えられる。昭和40年(1965)に台風の被害により、解体修理が行われた後29年が経過している。(佐藤 信芳)



普賢院四脚門正面全景



普賢院四脚門裝飾部材詳細



## 県指定文化財 金剛峯寺大主殿等保存修理の設計監理

金剛峯寺は、高野山の中心部に位置し、旧称は青巖寺・興山寺の2寺であった。もとは高野山第二世真然大徳の廟所で、覚鑿上人が大伝法院を建て、その後に青巖寺・興山寺が建てられたので、廟所は背後の山の中腹に移された。これが寛永17年(1640)建立の真然堂で、平成元年に解体修理を行っている。今回の修理は、本山敷地内に点在する大主殿を中心とした下記諸建物の檜皮葺屋根を、6箇所をかけて葺き替える計画である。今年度は、檜皮の調達を行った。

**大主殿** 桁行53.9m、梁間39.5m、一重、入母屋造、軒唐破風付、檜皮葺、南面。玄関、会下、奥書院が突出する。平面積2,175㎡、軒面積2,450㎡、屋根面積3,005㎡。文久元年。

**鐘楼** 桁行三間、梁間二間、袴腰付、一重、入母屋造、檜皮葺、北面。  
平面積48.0㎡、軒面積83.6㎡、屋根面積103.0㎡。元治元年(1864)。

**経蔵** 土蔵造り、桁行四間、梁間三間、一重、入母屋造、檜皮葺、東面。玄関、向唐破風造。  
平面積40.2㎡、軒面積74.0㎡、屋根面積109.6㎡。延宝7年(1679)。

**山門** 一間一戸四脚門、切妻造、一重、檜皮葺、南面。  
平面積33.8㎡、軒面積101.5㎡、屋根面積130.0㎡。文久2年(1862)。

**会下門** 桁行五間、梁間一間、長屋門、一重、入母屋造、檜皮葺、東面。  
平面積91.7㎡、軒面積204.5㎡、屋根面積261.0㎡。19世紀中期。

**護摩堂** 桁行三間、梁間三間、一間向拝付き、一重、宝形造、檜皮葺、南面。  
平面積30.2㎡、軒面積79.2㎡、屋根面積106.0㎡。文久3年(1863)。

**かご堀** 梁間一間、延長231m、切妻造、檜皮葺。  
平面積462.0㎡、軒面積693.0㎡、屋根面積807.0㎡。

諸建物の檜皮葺屋根は、表面の摩耗が著しく溝状に水道ができています。そのため、乾くことができず常に湿潤な状態で、檜皮自体の腐朽が進行しています。棟が直行する隅の部分では谷状になり、特に摩耗・腐朽が進んでいる。雨漏れの生じている部分もあり、部分的には補修等も行われているが、面積が広大であるために覚束ない状況である。放置すれば木部にまで腐朽が進行するため、早急な修理が望まれている。また、箱棟はすべて木材によって造られているため、腐朽が目立ち欠落している部分も見られる。  
(佐藤 信芳)



金剛峯寺大主殿正面全景

## 重要文化財 野上八幡宮本殿 ほか二棟保存修理の設計監理

野上八幡宮では、弘治3年(1557)建立の「本殿」・「摂社平野今木神社本殿」の二棟を中心に、天文10年(1541)に根来衆徒の襲来で放火され、灰燼に帰した諸社殿の再建に着手し、元亀元年(1570)に遷宮式が行われた。引き続きいて天正元年(1573)には「拝殿」・「摂社武内神社本殿」・「摂社高良玉垂神社本殿」が再建されている。室町時代末期から桃山時代にかけての建築式上の変革期に建立された社殿は、それぞれの時代の特徴を合わせ持った社殿群である。

社殿は、残された棟札により幾多の修理が行われ、先達の英知が傾けられ、現在まで、守り伝えられている。昭和19年(1944)に重要文化財に指定され、昭和34年(1959)に国庫補助事業で本殿他4棟保存修理工事が行われている。今回の修理は、1993年10月より18箇月をかけて、「本殿」・「摂社武内神社本殿」・「摂社平野今木神社本殿」の屋根葺替および塗装修理を行った。

屋根は、前回修理より34年が経過して檜皮表面の摩耗が進み、軒先では雨漏り寸前であった。檜皮葺の耐用年限は、立地条件等に左右され30年前後とされている。日当たりの良い「本殿」と木立の中に立地する「摂社平野今木神社本殿」では破損の状況に明らかな違いが見られた。「本殿」は、檜皮先端部分の摩耗破損であるが、「摂社」の檜皮は、同様の摩耗と湿気による腐朽破損が認められた。檜皮が腐朽すると雨漏りを誘発し、保存上好ましくない。(佐藤 信芳)

## 国指定名勝 粉河寺庭園 六角堂保存修理の設計監理

六角堂は国指定名勝粉河寺庭園の指定地域内にあり、史跡名勝建造物緊急修復事業として国庫補助を受け、平成7年1月から解体修理に着手した。工事期間は1年間の予定である。

六角堂は粉河寺本堂の南東に位置し、西面する。堂の正面半分は吹き抜けて石敷きの礼拝空間で、後半分は間仕切って三十三観音を祀っている。これとよく似た建物は紀三井寺にもあり、西国巡礼の札所寺院ならではの建築物である。建立年代や建物の沿革の詳細は明らかでない。

現在の粉河寺本堂は正徳3年(1713)に焼失し、享保5年(1720)に再建されたものであるが、正徳以前の状況を示す境内の古図に六角堂は描かれていない。六角堂に安置している観音像には、元文4年(1739)の墨書銘があり、六角堂は本堂の再建に引き続き建立されたものと推定された。堂の内外には、18世紀後半から現代に至るまでの多くの参拝者の打ち付けた巡礼札や、参拝の際の書き付けが無数にあり、民俗資料ともなっている。



(鳴海 祥博)

粉河寺六角堂 修理前

## 和歌山県指定文化財 日神社本殿保存修理の設計監理

日神社は西牟婁郡白浜町十九淵の富田川河口の左岸にあり、国道42号線に面して鎮座し、熊野本宮の祭神を勧請したと伝えている。

本殿は、大規模な一間社隅木入春日造・松皮葺・軒唐破風付の社殿で、部材の随所には各種の多様な建築彫刻と軸部は丹塗及び彫刻類・斗栱などには極彩色が施され、装飾を主眼とした華麗な社殿である。建立年代を示す史料はなく確定することはできないが、様式・手法よりみて江戸時代中期17世紀末から18世紀初頭の建立になるものと考えられる。

当神社には正平六年(1351)から文化八年(1811)にいたる8枚の棟札が保存されており、造立や修理の経緯が知られる。それぞれの棟札には『若一王子権現』との記載があり、当地は熊野参詣道のうち「大辺路ルート」にあたりこのルートにも王子社が勧請され、この社殿はいわゆる熊野造と言われる社殿形式を知るうえでの資料でもある。

今回は松皮の葺替えを実施中であるが、小屋組から文政七年(1824)造立・棟上の墨書が確認され、相当大規模な修理があったとみられることから、今後その内容を確認する必要がある。

(山本 新平)



日神社本殿 修理前

## 和歌山市指定文化財 海禅院多宝塔保存修理の設計監理

海禅院は景勝地和歌浦に浮かぶ小島「妹背山」の東麓に所在し、石造の三段橋を経て境内に至る。慶安元年(1648)に徳川頼宣の生母お万の方(養珠院)が家康の三十三回忌追善として法華経題目七字を20余万の片石に書写し、石巖を鑿ってこれを納め石碑と小堂を建立し、承応二年(1653)に頼宣が多宝塔を建立したという。

地下の石室に多数の七字題目石を納め、法華経題目碑を本尊に見立てた特異な多宝塔で、禅宗様の様式を交えるが和様を基調とした本瓦葺の三間多宝塔で、紀州藩の御大工が携わったとみられ、良質の総檜造の正当な手法になる多宝塔で、数少ない日蓮宗の多宝塔で、江戸時代初期の建立になる貴重な遺構である。

今回の修理は屋根葺替と縁廻の修理の予定であるが、地盤の不同沈下と木部の不朽が大きいいため修理方針を変更する必要があると生じてきた。

(山本 新平)



海禅院多宝塔 修理前

## 重要文化財 長樂寺仏殿保存修理の設計監理

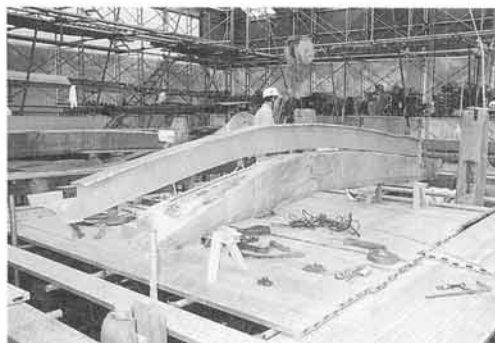
長樂寺は有田郡吉備町植野にある臨濟宗の寺院である。日高郡由良町興國寺の開山、法燈国師心地覚心(1207~98)の隠居所であり、廟所であったと伝えられる長樂寺の創立年代は、今回の工事に伴う発掘調査の結果からも13世紀末と推定された。仏殿は解体工事での発見墨書より、寺蔵文書にも記された天正五年(1577)に再建されたものと考えられる。

桁行三間、梁間三間、一重もこし付、寄棟造、本瓦葺の建物はその顕著に現われる特徴：尾垂木付き禅宗様二手先詰組、二軒扇垂木、四半敷の床、鏡天井の内陣と化粧屋根裏の外陣、虹梁と大瓶束による柱の省略、弓連子、柱の粽、海老虹梁ほか線形等に見られる装飾や技法により、禅宗様建築の中世末における流れを示す貴重な資料となっている。また大虹梁の下に据えつけられた挿肘木に見られる彫刻は、本格的な禅宗様建築であるこの仏殿が、中世から近世にかけて紀州における装飾建築の大きな流れの中にあることを示唆している。

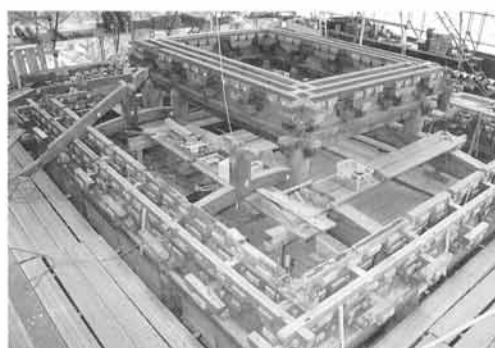
解体に伴う調査より、天正の建立当初には軒が未完で藁葺きの仮屋根が掛けられており、軒を整備し瓦が葺かれ、須弥壇が新造された宝永八年(1711)、北面軒廻りと小屋組の修理、向拝の新設、正面中央間扉廻りが改造された延享四年(1747)、来迎壁が撤去され仏壇が設けられた寛政十三年(1881)、東側面のお出入り口が変更された天保十二年(1831)などの整備、改造の変遷が推定された。今回の修理においては、当初の設計意図が最も完成された時期として、十八世紀初頭の姿に復するべく現状変更が行われた。

平成六年度において、主要構造部の木工事、屋根工事が完了した。当初材や工法の保全を前提とした上で、人工木材など合成樹脂の使用や、鉄骨による構造補強、また瓦葺きにおいて軒先部分を空葺きにするなどの若干の工法の変更が行われた。

(多井 忠嗣)



大梁の鉄骨補強の状況



組物の組立状況



扇垂木組立の状況

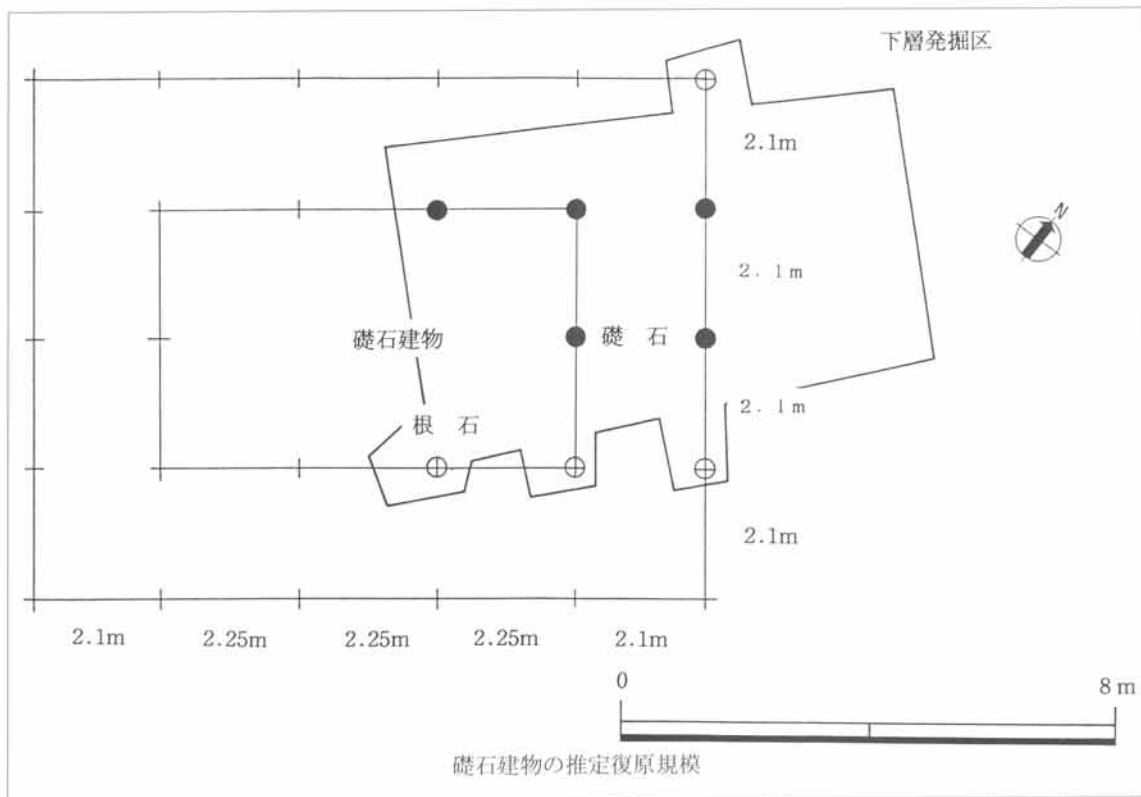


## 長楽寺防災工事に伴う発掘調査

調査地は長楽寺仏殿の南西方向32mの地点で、東西8m、南北10mの範囲を発掘し、下層の灰褐色土層（焼土・炭化小木材片や多量の土器を含む）の下から礎石建物を検出した。この礎石建物は礎石と根石の配置からみて、四面庇の建物で間口5間（10.95m）以上で、奥行4間（8.4m）の大規模な建物と推定され、今回検出したのはその北東部分にあたる。瓦はごく少量しか出土していないことから、屋根は檜皮葺か板葺とみられる。

下層出土遺物は中世の土器・瓦・石鍋（破片11点）・小型硯（1点）と宋銭（皇宋通寶、紹聖元寶、聖宋元寶）などである。土器には土師器（椀・皿）・瓦器（椀・皿）、須恵器（皿・甕・こね鉢）、陶器（緑釉陶器碗・山茶碗・灰釉陶器碗・常滑焼甕）、磁器（中国産の青磁椀・皿、白磁椀・皿・水注）等があり、破片総数は13089点で、このうち土師器と瓦器とで99%を占める。これらの土器の大半が13世紀代のもので、一部12世紀代のものも含む。軒平瓦（2点出土）は曲線頸、唐草文で、12世紀後半に所属すると思われる。

今回検出した礎石建物は4面庇の堂々とした建物であり、12世紀後半に創建され、13世紀末に火災にあい廃絶したものとみられる。さらに、この付近に14世紀頃まで南城寺が存在していたことが、文献から確認されているので、今回検出したのは南城寺に関連する建物の一つと推測される。それも中心伽藍の主要堂塔ではなく、塔頭とみられる。（菅原 正明）



## 海外研修報告：韓国

全国埋蔵文化財法人連絡協議会主催の「韓国・歴史と文化を訪ねて」に参加した。訪問先は釜山・慶州・儒城・扶余・ソウルで、期間は平成6年10月24日～29日までである。

10月24日（月）ピカピカの関西空港を14時40分に離陸し、雲海の中の飛行を楽しんでいるまもなく、16時に韓国の南端の金海空港に着陸した。ここが韓国第2の都市釜山である。ここから訪韓の1日が始まった。海風があり、やや涼しい。早速、金海貝塚を訪れた。史跡として保存されてはいるが、なんとなく裏寂しい。夜の釜山の町には赤十字のネオンがあちこちで輝き、教会の数の多さに驚かされた。

2日目には古都慶州へ高速バスは走る。キョンジュ、その懐かしい名を耳にし、心が弾む。霧の中、仏国寺を訪れる。広大な寺域が良く整備されており、紅葉しかけた秋のたたずまいが、何か日本の風景を思い出させる。艶やかなチマ・チョゴリの新婚さんも何組か見掛けた。彩色の美しい諸堂の説明を一つ一つ聞きながら見て廻った。次いで慶州文化財研究所を表敬訪問し、意見交換を行った。所長さんの好意で埋蔵文化財担当の人に芬皇寺・皇龍寺を初めとするこの地域の文化財の案内をしていただいた。皇龍寺は、我が国の平城宮跡と同じく SITE MUSEUM として保存整備が行われており、その寺域の広さに驚かされた。また寺域の西側にある展示室で、皇龍寺から出土した遺物を見ることが出来た。併せ、月城の北側で行っている発掘現場も見学した。穏やかな日差の中、新羅の歴史の中にいざなわれてゆく1日であった。



皇龍寺塔跡

3日目には慶州をあとにし、低い山間を縫って一路、百濟文化の揺籃の地、扶余・広州に向かった。日当たりの良い山裾の明堂の地に造られた饅頭形の墓が多く目につく。柿の実のなる農家の景色を見詰めていると、何かほっとした懐かしさがこみあげてくる。高速バスは順調に走る。初めに扶余文化財研究所を表敬訪問し、埋蔵文化財に関する意見交換を行った。引き続いて扶



湖巖美術館

蘇山城の土塁の発掘現場を案内していただいた。百濟・新羅・高麗の各時期の土塁が積み重なっており、見ごたえのあるものであった。この後に、国立扶余博物館と広州博物館を見学し百濟文化の多様な遺物を見学した。特に古墳公園内の武寧王陵古墳の石室内部の展示方法は面白かった。

4日目には、韓国の首都ソウルへ向かう途中で湖巖美術館を訪れ、高麗青磁や粉青沙器の優品を多数見ることが出来た。午後ソウルにつき、文化財研究所を表敬訪問し、出土遺物をどのようにして保存処理しているのかを実験室で説明を受けた。特に慶州で工事中に出土した馬冑の化学処理について種々の意見交換を行った。この後に、埋蔵文化担当者により、景福宮の発掘現場を案内していただき、今後10年間にわたる宮殿跡の発掘調査及び復原整備予定についての説明を受けた。引き続き国立民俗博物館を訪れ、館長の趙由典さんと歓談し、館内の展示を見せていただいた。一昨年に再建し、展示も一新したためか、1日で約1万人の入館者があるという。特に一般の人々に理解してもらえるように色々な復原展示をしており、その規模の大きさに驚かされた。ここには韓国の人々の歴史が活写されていた。

5日目には、朝から待望の国立中央博物館を訪れた。韓国の歴史をそのまま示す膨大な数の展示品にただ見とれるばかりであった。とても全部は見られず、特定のコーナーをじっくり見回った。特に先史時代より新羅時代までの遺物は、日本で出土した同時代の遺物を思い浮かべ比較してみると実に楽しいものである。それに新安沖海底から採集した遺物は前々から知っていただけに、本物の迫りに圧倒された。中央博物館の館藏品は物言わぬ韓国の歴史証人であるといっても過言ではない。ただこの建物は旧朝鮮総督府の建物であることから、来年度には取り壊されるとの話もあり、ちょっと気がかりである。今回の旅の案内を担当したガイドの洪仁鎬さんが、日韓の歴史を正確に踏まえ、感情を抑制しながら正確な日本語で話していたバランス感覚の良さには驚きでもあり、羨ましくも思った。北朝鮮で生れ、戦後に韓国に移った68才のオバチャンではあるが、心配りのあるオモニの温かい韓国の心を見る思いがした。穏やかな秋の日の韓国の古都の旅は、私を悠久の韓国の歴史の中へといざない、いつの間にか我国の歴史的風土と一緒にしてしまうのは何であったのであろうか。韓国

の深い文化の源流が、戦争という悲しい時代はあったが憂愁を越えて、今尚、文化財を通して、地下水のようにとろとろ流れていることを感じる。それは韓国の文化遺産の中に人々の生き様が風雲に絶え、残されてきたためではなかろうか。秋の日の穏やかな韓国で「温古知新」の言葉をかみしめた。

(菅原 正明)



国立中央博物館

## 海外研修報告（全国埋蔵文化財連絡協議会・近畿ブロック）

今回第3回目の海外研修として中華人民共和国を対象に実施した。参加団体は8団体総勢19名で、11月2日から11月9日までの8日間であった。研修地は主に北京・西安を基点とし、職員の見識を深め、かつそれを文化財行政に反映することを目的としたものである。以下、紙面の都合上、訪問先順に簡単に記す。

11月2日 午前8時関西国際空港に集合。諸注意の後、出国手続きをする。やや緊張する。北京空港到着後、中国社会科学院考古研究所の馮浩璋氏のお出迎えをうけ、研究所に表敬訪問をする。日本ではテレビ等でよく紹介される青銅器が無造作に幾つも並べられ、これらを目のあたりにして中国文明の水準の高さを改めて認識する。と同時に、「日出ずる国」が聞いて呆れた。

11月3日 早朝、金縷玉衣で有名な満城漢墓、戦国時代の都城で有名な燕下都遺跡に向けて出発。満城漢墓は河北省満城県の陵山山頂に位置する。草木も生えない石灰岩の山である。現在はここへ行くのに徒歩か、ロープウェイである。我々はもちろん後者の方を選択した。（時間制約!）漢墓は南北に1号墓・2号墓の2基が並ぶ。岩肌をくり抜いて墓室とし、墳丘などがなかったために二千年以上もの長いあいだ盗掘からまぬがれ、数多くの貴重な副葬品が出土している。

1号墓は「中山内府」という銅器の銘文から紀元前113年に没した中山王劉勝の墓、2号墓はその夫人竇綰の墓と推測されている。劉勝は武帝の庶兄にあたる人である。なお、1号墓のすぐ南に未発掘の3号墓があるという。墓室は想像を絶する大きさ、副葬品もすごい連発であった。

燕下都は同じく河北省に位置する。ここに着いたのはもう夕闇も迫る頃であった。中国の広大さを実感する。燕国南部の重要拠点で、東と西の二城に分かれている。現代は見渡すかぎりの平原で、一部の城壁と、城外にある老姆台と呼ばれる版築基壇が遺るのみである。これの規模は南北約110m、東西約で90mで、かつてはこの上に大きな建築物があったといわれ、性格については離宮とか外交使節団の宿泊使節などが考えられている。暗闇の中皆が写真撮影に精を出す。

11月4日 今日も早朝から集合する。大葆台漢墓に行く途中蘆溝橋に立ち寄る。りっぱな石橋である。日中戦争勃発の地として有名である。ちょうどその時映画のロケをしていた。兵士姿のアルバイトのエキストラが笑いながらふざけ合っている。何か虚しさと矛盾を感じた。大葆台漢墓は北京市の西南の郊外で発掘された前漢墓である。昨日の満城漢墓にも圧倒されたが、ここも一級の漢墓である。発掘された当時の墳丘の遺存状況は東西100m、高さ7mである。2基が一体となったものである。1号墓の墓室の規模は全長23.2m、深さ4.7mである。構成は墓道、甬道、外回廊、黄腸題湊、内回廊、



蘆溝橋の上で

大葆台漢墓は北京市の西南の郊外で発掘された前漢墓である。昨日の満城漢墓にも圧倒されたが、ここも一級の漢墓である。発掘された当時の墳丘の遺存状況は東西100m、高さ7mである。2基が一体となったものである。1号墓の墓室の規模は全長23.2m、深さ4.7mである。構成は墓道、甬道、外回廊、黄腸題湊、内回廊、



中室、後室等から成り立っている。凸字型の墓室である。2号墓もこれと基本的に同じである。この古墳で特に注目すべきは「黄腸題湊」と呼ばれる部分で、桧の角材を内回廊に小口積みしたもので、実に15,880本も使用しており、これらは現在も芳香を漂わせているらしい。この香りが墓室にとって重要であったと考えられている。また、築造当時の保存に対する工作も墓室の周辺を防腐、防湿作用のある木炭と白膏泥で覆っていることがよく分かった。この遺跡を実見して、現位置を保ちその上に覆屋を掛け見学施設としているのは、中国であるから成せるものだと改めて実感した。その夕刻、中国西北航空にて西安へ移動する。ジェット機で一時間半である。気候と周りの環境が北京とまるで違うことを身をもって感じる。一言でいうと埃っぽい街だ。埃で街全体がかすんでいる。

11月5日 社会科学院考古研究所西安研究室を敬訪問する。副主任の張 連喜氏から成安における発掘調査の実状のご説明をうける。中国では洛陽鑽と呼ばれる長い柄の着いたステッキでボーリング調査を基本に行なうらしい。夕刻、阿房宮遺跡でボーリング調査を見学する。この日は曲江池遺跡、唐明徳門址、唐長安城の大明宮遺跡などを見学する。この日は主に都城関係の遺跡を巡る。



洛陽鑽によるボーリング風景

11月6日 半坡博物館に赴く。副館長の王 志俊氏からご説明をうける。半坡遺跡は1921年にアンダーソンによって発見された有名な環濠集落遺跡である。ここでもまた遺跡全体に覆屋を掛けて、周りから自由に見学できるシステムをとっている。遺構の中でもその名の通り環濠は立派なもので、幅6～8m、深さ5～6mもある。次いで、秦始皇帝陵と兵馬俑坑へ赴く。築造に30年の歳月をかけた陵墓を横目に見ながら兵馬俑坑に着く。実はこの博物館の見学を、最も楽しみにしていた私は、素人考えであるが、館内の写真撮影禁止にはがっかりした。ところが館内では、「兵馬俑と一緒に写真を撮ってみませんか」というふざけたことが書いてあり、外貨の獲得に必至な感があり、政治の一端を垣間見た。

11月7日 この日は乾陵と茂陵へ赴く。乾陵は唐第三代皇帝高宗と則天武後の合葬陵である。乾陵の墓道は全長65m、幅約3.9mの岩盤を掘り込んでいる。内部は盗掘をうけていないことが確認されている。則天武后墓は一般公開されており、高松塚の祖形という言葉が適合する。茂陵博物館へ行く。英雄霍去病墓を遠目に見る。



乾陵を望む

11月8日 西北大学を訪問する。所蔵遺物を見学。陽陵へ赴く。元気な人は頂上まで徒歩でのぼる。北京に戻る。11月9日 北京大学を訪れ帰途に着く。中国を肌で実感した。(佐伯 和也)

